

図書館だより 第32号



昨年12月26日に図書館・本館で「小学生のためのおはなし会」を開催しました。約40人の子どもたちが集まり、絵本の読み聞かせやおはなしに耳を傾けました。また、折り紙を使ったモビールの工作も行いました。

目 次

時代を変える 図書館サミット 報告	2
東海北陸の図書館レポート.....	3
いちおしライブラリー 第20回 「山岳小説を読む」.....	5
岩倉政治文庫の資料 6	7
レファレンスあれこれ	8

「時代を変える 図書館サミット」報告

平成20年11月12日(水)13日(木)の二日間、図書館サミット実行委員会・豊島区が主催する「時代を変える 図書館サミット」が、豊島区立舞台芸術交流センター、自由学園明日館において開催された。テーマは、『読書離れ、活字離れの解消』、『文字・活字文化の発展』、『ITの高度利用』、『本をつくり送り出す人々との協働』、『地域の課題解決と文化創造』であった。図書館関係者や出版社、作家、大学教授、書店など文字活字文化に関わる者が、図書館や文字活字文化を取巻く現状を踏まえ、地域における知の拠点として課題解決や文化創造にかかわる図書館の活性化を模索するものである。

初日は、福原義春(財団法人文字活字文化推進機構会長)氏の「書物と文化」と題したスピーチと、長尾真(国立国会図書館長)氏の「学問と情報」と題した基調講演からはじまった。福原氏は東西の古典を例示しながら本の世界を解説し、市場原理に左右されない出版文化の必要性を述べた。とともに、これらを収蔵する図書館を「知の収蔵庫」と位置づけ、図書館に関わる人材育成が課題であるという。長尾氏は、図書館を利用しての新しい知識の創造、そして成果物を図書館へという知の循環について、さらに国立国会図書館でのIT技術を駆使した活字資料の電子化への取組み(必要な情報だけをページ単位や章単位に編集可能なシステム)を紹介した。

「図書館は新しい時代をつくれるか」と題したシンポジウムでは、パネリストそれぞれが図書館の利用体験を通して図書館のあり方を提案する中で、ITの進化で活字資料が無くなるのではと危惧されているが、ピンポイント検索が可能なITと比べて、活字資料には、必要な情報にたどり着くまでの目次や頁を繰る途中に出会う思いがけない記述との出会いがあるなど、共存が可能であるとの発言があった。また、現在のITは、デジタル情報のストックに関する配慮が足りないのではないかとの指摘もあった。

翌日の「図書館の新しい役割」を討議する分科会では、パネリストに大学教授、出版社、文学館長、作家をむかえ、大学生の活字離れの現状報告や公立図書館との連携の可能性と出版界が図書館以上に厳しい現状にさらされている今を活字文化の正念場と捉えているなどの議論が行われた。さらに作家からは、原稿料が取材の労苦にふさわしい対価となっているか、それぞれの立場からの発言がなされ、必ずしもテーマに沿った議論にはならなかった思いもある。

今回の「図書館サミット」は、平成20年2月19日に中央教育審議会が答申した「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興について - 知の循環型社会の構築を目指して - 」と教育基本法の改正にともない平成20年6月11日に改正された「図書館法」を意識した企画とも受けとれ、また会議の最後に提案された「マニフェスト」にもその趣旨が反映されていたと思う。今回の企画を機会に主催にあたった「文化創造都市 としま」を標榜する東京都豊島区の文化行政、図書館経営の取組みに注目したい。

(図書館長 小川)



東海北陸の図書館レポート

「時代を変える 図書館サミット」マニフェスト

私たちは、書物と読書が、知識の深化と文化の発展において果たす重要な役割を認識する者として、これを支える図書館がわが国において直面する難局について危機感を共有し、また図書館の将来におけるありかたに強い関心と期待を掲げつつ、つぎのマニフェストを広く発信するものである。

1. 公共図書館は、現在にあって、自治体の財政難や一般的な活字離れなどの困難な状況のもとにおかれていたとはいえ、その充実、地域社会と自治体の活性化にとって不可欠である。
2. 自治体は、地方分権時代における知の拠点として、みずからの政策形成に資するため、また、地域住民の自立的活動を支援するため、公共図書館の蔵書の拡充に注力するとともに、専門的能力をもつ職員を配置して、その負託に応えるべきである。
3. 図書館の職員は、出版・情報産業や研究者をはじめとする、各分野の専門家の助言を仰ぐなどして、選書のための技能を向上させ、さらに情報の整理・体系化によるサービス業務の高度化を図るべく、必要な資質の涵養に努めなければならない。
4. 図書館のサービス業務にあたっては、進行するIT革命の成果を十分に活用し、また多様なメディアとの協調のもとに、文字・活字文化のいっそうの振興に寄与することが肝要である。
5. 国立国会図書館、公共図書館、大学図書館、学校図書館をはじめとする各種の図書館は、広範な利用者との不断の対話を継続するとともに、各館の相互の交流と連携をとおして、読書への愛着と知識への情熱を高揚させ、社会と文化の成熟に貢献することが要請される。

平成 20 年 11 月 23 日

「時代を考える 図書館サミット」の 参加者を代表して
実行委員会委員長 粕谷 一彦

平成 20 年 10 月 30 日（木）と 31 日（金）に名古屋市で行われた「東海北陸地区公共図書館研究集会」に参加した。研究集会のテーマは「地域・関係機関と連携した児童・青少年サービス」であった。

初日は、愛知県・西尾市立図書館、岐阜県・郡上市しろとり図書館、三重県・四日市市立図書館、愛知県・安城市中央図書館の事例発表があった。二日目は「幼児期における絵本の大切さ」と題して、立教女学院短期大学講師、中村 柁子氏の講演があった。

事例発表の中から西尾市立図書館の取り組みと中村柁子氏の講演要旨を紹介したい。

1. 愛知県・西尾市立中央図書館の事例

「児童サービスの充実 学校図書館との連携と支援」

(1) 西尾市では平成 18 年 10 月に、「西尾市子ども読書活動推進計画」を策定し、それに基づいて、いくつかの事業に取り組んでいる。

平成 17 年、学校図書館への貸出のための資料費を予算化（135 万円）し、平成 18 年には、市内の小・中学校図書館へ本を配送するサービスを本格化した。

本の配送および書架へ本を返す作業等は、シルバー人材センターに委託。年々利用する学校が増え、現在、年間 6,300 冊の利用がある。

(2) 平成 20 年 6 月には図書館の中に「学校図書館支援室」を開室。専任職員を 2 名配置。調べ学習のためのテーマ別の基本図書のリスト作りや配送サービス本の手配、学校図書館司書の研修に役立つための本の収集、学校からの図書館見学を受け入れ、施設の案内などの仕事を行っている。

(3) 年間を通して学校が必要とするテーマの本を学校図書館司書などが利用しやすいように、図書館にコーナーを設けて置いている。

現在、富山市では、西尾市とは異なり、公共図書館と学校図書館は、資料収集や図書館サービスにおいて、お互いに独自性を持ちながら活動している。しかし、当館は、学校図書館司書を通して、資料の貸出しや調べ学習に関する情報の提供なども行っている。

今後も子どもの読書活動を支える両輪として協力していきたい。

<西尾市と富山市の比較>

	西尾市	富山市
人口	108,253 人 (平成 20 年 3 月現在)	417,905 人 (平成 20 年 3 月現在)
面積	75.78 k m ² (同上)	1,241.85 k m ² (同上)
蔵書数	287,000 冊 *「日本の図書館 2007」	885,000 冊 *「日本の図書館 2007」
職員数	22 人 (非常勤 15 人を含む) (同上)	* 53 人 (定数外 22 人を含む)
資料費	24,888,000 円 (同上)	82,681,000 円 (同上)
資料費 市民 1 人当り	230 円	198 円

* 「日本の図書館 2007」は 2006 年の統計

* 職員数は、平成 20 年(2008)4 月現在



2. 講演

- ・テーマ「幼児期における絵本の大切さ
～子どもと本を結ぶもの～」
- ・講師 立教女学院短期大学講師 中村 柊子氏

中村氏は雑誌「母の友」に「中村 柊子の絵本講座」を連載。著書には、絵本「えかきうたのほん」や評論「絵本はともだち」などがある。

保育現場で 36 年間、絵本を読み聞かせされた経験から、以下のような内容で話された。

- (1)子どもが絵本に目を向けるようになるには、子どもの内面にどんなことがら育っているのか。
 - ・幼児は絵本を通しての大人の語りかけや絵本の中の気にいった言葉を覚え、次々とまねるようになる。また絵本を読むことで、目をとめて、じっとものを観察するようになる。
 - (2)保育現場に絵本があることで、子どもが得る喜び
 - ・絵本に出てくる登場人物をまねて遊びを考えたりと、遊びが広がる。
 - (3)家庭での読書体験
 - ・家庭ではテレビやビデオなどが身近にあり、つい見せてしまうが、親は意識して絵本を読んで上げて欲しい。
 - (4)保育現場の実情
 - ・勤めた保育現場の本(絵本・童話)の環境や保育観(早期教育、テレビ視聴、紙芝居への偏り、保育教材としての絵本という取り扱い方)によってばらつきが多い。
 - (5)図書館への要望
 - 乳幼児を持つ父母に、図書館の窓口で日常的に本の紹介やアドバイスをしてほしい。
 - 地域の保育者への研修や読み聞かせなどをして欲しい。
 - ボランティアの養成をして欲しい。
- (本館・児童奉仕係 柴田)

いちおしライブラリー 第20回 山岳小説を読む

富山県の文学界では、郷土を舞台にした文学に注目が集まり、越中文学館の建設構想など郷土文学の保存への取り組みが高まっています。そのなかでも山岳文学に関するものでは、去年は、舞台化された『黒部の太陽』、県内で撮影が始まった映画『剣岳・点の記』なども話題となりました。

我々富山県人は、立山連峰の山並みを見て育ち、山から流れる水の恩恵にあずかりながら過ごしてきたと言えます。私自身、山への憧れがありながら、高い山には登ったことがありません。ただ、子どもが小学校のときにPTA登山で立山や僧ヶ岳と一緒に登ったことがある程度です。しかし、本のなかでは、剣岳を始めいろいろな山に登ることができました。本を読む楽しみは、自分が日常では体験できない世界に飛び込んでいけることにあると思います。子どものころから一つ気に入った本に出会うと自分が主人公になったつもりになって、暗記するほど読んだものです。また、これだ！という作品に出会うと、その作家の作品をとことん読み漁っていました。

「山岳小説」という言葉についての定義は曖昧だと思われま。山が登場する小説は、登山そのものにおけるドラマを描いた純山岳小説から、肩の凝らない山岳ミステリーまで山ほどあります。

今回は、私の勝手なジャンル分けから、山が舞台の小説、山の世界にどっぷり浸ることのできる本を紹介します。

<純山岳小説>

登山そのものにおけるドラマを描いた小説。

古典的なものでは、

『氷壁』井上靖 / 著 (新潮社 1956)

『朝焼け』安川茂雄 / 著 (朋文堂 1958)

『標高八八四 メートル』石一郎 / 著

(河出書房新社 1960)

『銀嶺に死す』瓜生卓造 / 著 (スフィヤール 1964)

『北壁』石原慎太郎 / 著 (二見書房 1971)

をぜひおすすめしたいと思います。

近年のものでは、以下の本を紹介します。

『白き嶺の男』谷甲州 / 著

(集英社 1995)

単独行者、加藤武郎を主人公に構成された短編集。著者は、あとがきにおいて、実在した加藤文太郎を意識して書いた作品であると述べています。7000メートル峰に登頂した経験のある著者にしか描けない登攀シーンは圧巻です。この作品で新田次郎文学賞を受賞しています。



『神々の山嶺 上・下』

夢枕 獯 / 著

(集英社 1997)

登山家マロリーは、はたしてエベレスト初登頂に成功したのか、主人公が歴史を変えるかもしれないカメラを手に入れたことから物語が始まります。伝説のクライマー森田勝と長谷川恒男を彷彿させる設定や最後の壮絶な登攀シーンに人間の限界と孤独を見ることができます。また、“ただ山に登る”ことだけに集中する主人公の精神の高揚も描かれています。

『灰色の北壁』真保裕一 / 著

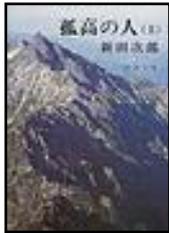
(講談社 2005)



表題作ほか2編を収録した短編集。『黒部の罅』は、富山県山岳警備隊を辞めて剣岳の外れにある山小屋の主人になった樋沼こと“黒部の罅”のもとへ、かつての部下から救助を求める無線が入ります。舞台は初冬の剣、源次郎尾根。登攀、遭難、山岳救助、海外遠征など様々な要素が盛り込まれ、しっかりと描きこまれた作品です。

< 山岳伝記小説 >

登山家や山に関係した人物をモデルにした伝記的小説。



『孤高の人 改版』

新田 次郎 / 著
(新潮社 1989)
(新潮文庫)

新田次郎は多くの伝記的小説を著していますが、一番にあげるとすればこの本ではないかと思えます。日本が生んだ不世出の登山家、加藤文太郎を描いています。この本は『栄光の人』『銀嶺の人』と並ぶ3部作で、人はなぜ山に登るのかを問いながら青春あるいは人生を描いた小説としても読むことができます。加藤文太郎本人の著作『新編単独行』(山と溪谷社 2000)も合わせて読んで比べてみると、文太郎の微妙な心の動きもわかります。

『冬のデナリ』 西前四郎 / 著
(福音館書店 1996)



厳寒のアラスカにそびえる北米大陸最高峰・デナリ(マッキンリー)初登攀に挑む男たちの物語、主人公ジローの自伝的小説です。暴風雨の中のピバーク、奇跡の生還、登山をめぐる壮絶なドラマとメンバーのその後の人生を描いています。著者は、1975年のダウラギリ4峰登山隊登攀隊長です。

< 山岳冒険小説 >

山、岩、雪、氷の世界に立ち向かう冒険小説。



『北壁の死闘』

ポプ・ラングレー / 著
(東京創元社 1987)

第二次世界大戦末期、原子爆弾の開発をめぐるナチ・ドイツが精鋭クライマーを集めて行った奇策。追い詰められた彼らが魔のアイガー北壁で繰り広げた必死の攻防には、手に汗を握って一気に読みきってしまった作品です。

『天空への回廊』 笹本 稜平 / 著
(光文社 2002)



エベレスト、最難関の登攀ルートである北西壁の最上部に墜落したアメリカの軍事偵察衛星。たまたま北東稜を下降中だった日本人クライマーは、酷寒地において、遭難した仲間の救出をきっかけに陰謀に巻き込まれていきます。山頂での自然との闘いを含め壮大なスケールで展開する冒険小説です。

< 山岳ミステリー >

山や渓流などを舞台にした犯罪・殺人事件を扱った小説。

梓林太郎・生田直親・太田蘭三などにより山を舞台にしたミステリーは数多く出版されています。なかでも森村誠一の作品では、黒部が舞台の『恐怖の骨格』(講談社 1977)、鹿島槍ヶ岳の『密閉山脈』(光文社 1984)をおすすめします。そのほか、最近の小説では、大倉崇裕の作品が読み応えがありました。



『生還』 大倉 崇裕 / 著
(山と溪谷社 2008)

表題作「生還」を始め、「誤解」「捜索」「英雄」と、山岳遭難救助隊特別捜査係・釜谷の活躍を、その部下・原田の視点を中心に描く短編集です。著者は学生時代山岳系同好会に所属しており、在学中は山三昧だったそうで、その経験が随所に表れています。特に『完全犯罪証明書』(講談社 1998)に収録されている短編『生還者』も見逃せません。(本館・館内奉仕係 北山)

岩倉政治文庫の資料 6

「赤尾の道宗」を題材にした著作



「^{あかお どうしゅう}赤尾の道宗」という人物を、ご存知でしょうか？
彼は、室町時代後期に生きた、「^{みょうこうにん}妙好人」といわれる熱心な浄土真宗の行者です。五箇山の赤尾集落（現在の富山県南砺市赤尾）に生まれ、蓮如の^{くんとう}薫陶をうけて「^{どうしゅう}道宗」の名をもらい、生涯をこの地で信心に捧げて生きたことから、このように呼ばれています。道宗がひらいた^{ぎょうとくじ}行徳寺は、現在も赤尾の地に残っており、五箇山の人々にとって重要な信仰の拠点であり続けています。

「^{みょうこうにん}妙好人」とは、浄土真宗において、「特に信仰心が篤く、徳行に富んでいる人」あるいは「浄土思想を自ら体得して、それを実践して生きている人」のことを指し、信者としての理想像であるとも言われています。こうした、尊敬の念を含んだ呼称にふさわしく、道宗の生涯は数々の伝説・逸話に彩られています。例えば道宗は、寝床に割木を48本並べ、毎夜その上に寝ていたと伝えられています。ある村人が「なぜ、わざわざそんな寝苦しいことをするのか」と尋ねたところ、^{どうしゅう}道宗は「阿弥陀如来様は私のような悪人ですら、ありのままにお助けくださる。そんな私が、毎晩安楽に眠っていたのでは、如来様のありがたいご恩を忘れてしまいかねない」と答えたといえます。^{ぎょうとくじ}行徳寺には、この割木の上に横たわる^{どうしゅう}道宗の姿を彫った木像が、現在も伝わっています。

また^{どうしゅう}道宗は、青年の頃出会った^{れんにょ}蓮如を、生涯にわたり師と仰ぎ、年に2~3度は必ず京都に住む彼のもとを訪ねて、教えを乞うたと伝えられています。ある時、赤尾に住む一人の百姓が、^{どうしゅう}道宗に向かって「あなたはしきりに我々が罪深い事を説かれ、念仏を勧められる

が、自分は自分なりに真っ正直に生きて、それでも罪深く地獄に落ちるならば、それはもう仕方がないと考えている。そういう者にとって念仏は必要ないと思うのだが」と疑問を投げかけました。これに対して明確な答えが出来なかった^{どうしゅう}道宗は、たちまち自分の不勉強さに恥じ入り、その場からすぐに京都の蓮如のもとへ教えを乞いに走った、とされています。

このように、労苦を厭わない一途な信仰心でもって、仏教の真髄に迫ろうとする^{どうしゅう}道宗の姿は、同じく仏教思想を探求する者として、岩倉にとっても興味深いものであったのでしょうか。^{ぎょうとくじ}行徳寺を実際に訪ね取材した成果は、「^{ぎょうじやどうしゅう}行者道宗」と題した伝記の中編小説に結実し、のちには「^{みょうこうにんあかお どうしゅう}妙好人赤尾の道宗」という小冊子にもなりました。これらの作品の優れたところは、^{どうしゅう}道宗の生涯を丹念に追跡し、数々の伝説・逸話を紹介しながらも、それらの行状がいずれも仏教に深く帰依し、その教えを実践していく過程で表れ出たものであったことを明確にした点にあります。^{どうしゅう}道宗の人物像はこれまで、ともすれば先にあげたような伝説・逸話の特異な点ばかりが強調され、「^{どうしゅう}道宗は偉い人物らしいが、変わった行動が多くて、どこがどう偉いのかわかりにくい」といった、焦点のぼやけたイメージに陥りがちでした。岩倉の手になる、これらの作品によって、はじめて道宗の全体的な人物像が明らかになった、と言えるでしょう。

この点については、岩倉自身も手ごたえを感じていたようで、後年「^{ぎょうじやどうしゅう}行者道宗」について「拙作のなかでも好きな作品の一つで、かなり成功した作と考えている」と述べています。（本館・館内奉仕係 舟山）

レファレンスあれこれ

Q. 故事成語“ かいよりはじめよ ”は英語で何と言うか。また、英語の“ It take one to no one ”は日本語で“ かいよりはじめよ ”にあたるか確認したい。

A. 最初に『成語林』(旺文社 1992)で日本の^{ことわざ} 諺について確認した。“ 隗^{かい}より始めよ ”とは、「すぐれた人物を招くためには、自分のような平凡な者を重く用いることからまず始めるのがよい」という意味で、「大きな事業もまず手近なことから始めるのがよい」という教えであり、転じて、「何事も言い出した者からまず実行すべきであるの意にも用いられる」と書かれていた。“ まず隗^{かい}より始めよ ”と、“ まず ”をつけても言うことがあった(中国の故事)。

次に『日英比較ことわざ事典』(創元社 2007)を見ると「まず隗^{かい}より始めよ」が載っていて、英文の“ Practice what you preach ”(自ら説くところを実行せよ)があがっていた。意味としては、「事を起こすにはまず自分自身から着手せよ」の意味で用いられる、とあった。他に『現代英語ことわざ辞典』(リーベル出版 2003)などの辞典を見たが該当するものはなかった。

“ It take one to no one ”については文法的には不自然なので、おそらく“ It takes one to know one ”ではないか辞典を調べたが、どれにも該当するものは載ってなかったと思われる。インターネットでの情報では、この文の意味を問う質問に対して答えが載っていた。それによると、“ It takes one to know one ”の意味は「自分がそうだから相手もそうだと思う(ある人を批判した場合、批判した人自身が批判された人と同じ欠点がある)」で、悪口をいわれた人が「あなたに言われたくない」「お互い様」と言う時に使う、と書かれていた。

Q. 金山茂人(東京交響楽団の最高顧問)の祖父で、立山の村長から代議士になった人物(名前は不明)について知りたい。

A. 最初に金山^{しげと}茂人で何か資料がないか調べたところ、『楽団長は短気ですけど、何か?』(水曜社 2007)という著作があり、「祖父が金山^{しゅうがく}従革」という記述があった。

次に“金山^{しゅうがく}従革”で検索すると、『越中人譚第48号』(チューリップテレビ2002)に収録されており、また、『富山大百科事典』(北日本新聞社 1994)にも項目があった。

他に『富山県郷土人物索引 第1集~4集』(富山県立図書館)の“金山^{しゅうがく}従革”の部分に以下の資料があり図書館が所蔵するものについては提供した。

『五百石^{ごひゃくこく}地方郷土史要』(五百石^{ごひゃくこく}区域小学校長会郷土史研究 1935)、『郷土に輝く人びと 第6集』(富山県 1975)、『明治・大正・昭和の郷土史 18 富山県』(昌平社 1982)、『立山町誌』(『五百石^{ごひゃくこく}町誌』と『五百石^{ごひゃくこく}地方郷土史要』の複製合本、新興出版社 1982)、『立山町史 下巻』(立山町 1984)、『先人の足跡探歩』(中井信光 1990)、『富山県民とともに』(北日本新聞社 1984)。

金山^{しゅうがく}従革は、1864年に立山村(現立山町)に生まれ、1889年初代立山村長となり30年近く務めた。1898年衆議院議員に当選。県会議員としても活躍し、郷土立山村の発展を願って、立山製紙や立山軽便鉄道などを興したほか、富山日報社の社長に就任するなど近代産業の育成に努めた。文化人として詩や書にも優れ、立山72峰にちなみ“七十二峰山人”と号した。

(新庄分館 尾屋)

平成 21 年 1 月 23 日富山市立図書館 編集 発行 富山市丸の内 1 丁目 4 - 50 TEL076-432-7272
HP アドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp> E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp